

## CURES Report

**〈金沢大学経済学部角間キャンパス移転記念講演会〉  
都市と大学（講演要旨）**

宮本 憲一

今日お話しさせていただくのは「都市と大学」という題であります。もともと学校というものは都市の産物であります。古代ギリシャの都市に学校ができてくるわけですが、学校は余暇と結びついてできているわけです。余暇があり、いろいろな分業が行われて、精神的労働が一定の職業となる。また、その精神的労働の成果を学ぶという必要性がでてくる。そういうのは都市の産物でありまして、学校というのは都市と切っても切れない関係にあるわけですが、中世に入りますと、修道院のような、自給自足をしながら学ぶという形態がでてきて、必ずしも学校が都市の独占物ではなくなりましたが、もともとは、私は学校というものは都市の産物だと思っております。

学校制度というものは小学校からできたのではなくて、大学から誕生したのであります。その歴史は古く、11～12世紀に遡ります。大学といっても今のような壮大な校舎があったわけではなくて、むしろ人、ソフトの方が重要なのでありまして、教師と学生の自治団体として、イタリアのボローニャで最初に大学が設立されました。都市と大学の関係は中世以来、不可分の関係として続いているのであります。私が今日話したいのは、大学というのは都市によって規定されるし、都市は大学によって規定されるということでありまして、ここではアダム・スミス为例にとりたいと思います。

アダム・スミスはスコットランドのグラスゴー大学で学びました。この大学は当時の田舎大学であったのですが、きわめて自由な

大学でありました。グラスゴーという町がアメリカとの貿易で非常に発展していて、ちょうど近代の産業革命によって動いていく時期に、いわば先端を走っているような商業の町でありまして、当時はきわめて自由な雰囲気であったと言われております。

当時の大学には経済学という科目はなく、それと非常に近い形で道徳哲学という科目がありました。スミスは道徳哲学を担当するハチソンに弟子入りするのですが、このハチソンは無神論者でありまして教会から破門されますが、当時のグラスゴー大学は敢然としてこのハチソンを守ったと言われております。スミスは彼の後を継いで道徳哲学の教授になるわけですが、その講義には魅力があって、グラスゴーの商人層が争って子弟をスミスの講義に出席させたということです。

この大学にはもう一つ重要な功績があります。蒸気機関の発明者でありますジェームズ・ワット、彼は最初ロンドンで修業しようとしていますが、その当時はギルドの支配が強くそういう研究はできませんでした。それをみかねたグラスゴー大学が彼に研究させまして、そのおかげでワットは、この大学にいる時ではありませんが、後に蒸気機関の発明をするわけです。グラスゴー市とグラスゴー大学の環境というものが、イギリスの近代化の出发点において、非常に大きな役割を果しているんですね。

その意味でいいますと、大学はその都市の性格、その都市が社会にどのような役割を果しているかという性格によって規定されてくるのだということを、グラスゴー大学、そし

てその中でうみだされた、スミスの国富論やワットの蒸気機関の発明に知ることができるように思うのです。

日本の場合は、大学というものは、古来の伝統の上にできあがったというよりは、洋学、欧米の学問を研究・普及させることを目的として立地したという性格がありまして、ここが、先程のグラスゴー大学のような、都市と大学の関係を断ち切ってしまうような性格をもたせてしまう出発点にもなっていると思うのです。それぞれの地域社会の中で醸成されてきた学問の上に立って大学が形成されてきたというよりは、国家が画一的に欧米の学問を研究・普及させるためにつくりあげたというところに、やはり日本の大学の問題点があるように思います。

明治19年に帝国大学令が施行されたわけですが、この帝国大学令では、大学というのは帝国大学しか認めないという方針でありまして、国家のため人材を養成するというのが大学なのでありまして、それは帝国大学しかないのであります。この帝国大学主義というものがいろいろなところで問題を投げかけてくるわけです。

例えば、東京商科大学が設立される経緯を見ますと、この事がよくわかるわけなのです。当時、東京高等商業学校というのは、日本における経済学の研究では最高峰の位置を占めておりまして、この東京高商を大学に昇格させようという連動が明治の終わりに起きるのですが、高商ごときを帝大にするわけにはいかないという官僚や政治家たちの帝国大学主義に潰されて失敗に終わります。

この失敗に嫌気がさした東京高商の教授の関一は、大正3年に大阪市の助役になり、その後市長になり、20年間大阪市の近代化に努めることになりました。

そういう帝国大学主義を崩すのは、第一次大戦後の近代化・民主化の波であります。この波の中で、学制全般にわたる改革の必要性がでてまいりまして、新しい大学令がだされます。大正9年には私立大学が認められ、帝大以外の国立大学も続々と誕生します。先程の東京高商も同じく大正9年に東京商大となるわけです。

こういう形態を見ますと、日本の場合、必ずしも大学というものが自由な形で市民の中からつくりあげられたとは言い難いわけですが、他の国、ドイツなどでもそんなに自由に大学がつくられてきたのではありまして、関西学院大学の早島瑛先生の論文を読ませていただきますとこの事がわかります。

最初に経営学、つまり商学のようなものが大学として認められるのはケルン大学なのでありますが、このケルンに商科大学をつくるという時に非常な反対を受けたわけです。経営学などは学問じゃないとされて、大学として認めさせる事が大変難しかったのでありま



▲1989年10月28日(土)に行なわれた金沢大学経済学部角間キャンパス移転記念講演会

す。しかし、実際社会の要求上、経営・商学を大学としても研究を始めなければならないという要望が非常に強くなりまして、それでケルンの商人たちが集まりまして金を出して、市立でケルン大学をつくりました。そういう意味では、最初の経営学とか商学というものは、正に都市の中で生み出されたわけであり

ます。  
このケルン大学と同じ様な事を試みた日本の大学があります。それは私の大学、大阪市立大学であります。東京高商を大学にしたいと考えた関一は、このケルン大学の状況を実に詳しく調べました。関一は先程も申し上げましたように、大学昇格運動の失敗の後、大正3年に大阪市の助役になりまして、その後市長となるわけですが、大正9年に教育制度の大改革がありますと、大阪にも大学が必要だという声がでてまいります。大阪商業学校を大阪商大にしたい、と関一は考えるのでありますが、当時の日本には、大学は国立と私立しかなく、自治体が大学をつくるというのは大変な事でありました。しかし、関一は東京高商の大学昇格運動に失敗した時にいろいろ考えていた大学の構想があったものですから、この際、ケルン市立大学に倣って、大阪市民が金を出してくれるならば、大阪市民がこぞってこの大学を応援するという姿勢があるならば、ケルン大学のような大学をつくってみたいと考え、ついに昭和3年、大阪商科大学を設立するわけです。これが私の大阪市立大学の前身でして、日本で最初に自治体がつくった大学なのです。

関一が大阪に大学をつくらうとした時、文部省の反対を受けるのですが、それは今日とよく似た事情がありまして、大学というのは都市の中に置いてはいけな、もっと静かな思索のできる田舎がいいという意見がかなり強かったのであります。しかし、関一は、そうではないと主張するわけです。ドイツの近年の大学の事を丹念に調べてみると、圧倒的に

学生は都市を好んで、都市に集まっているのではないか。田舎につくった大学には学生が集まらない、それは何故かという、やはり学徒というのは都市の文化にあこがれているからである。都市の文化に結びついて大学は発展しているのだから、田舎に置いてしまうと、あたかもかつての修道院のように、哲学的な思索に耽けられるようにみえて、かえって現代の学生はそれで刺激を失って、学問の発展はしない、と言うのです。「都市は大学と共にあって、大学は都市と共にある。」という有名な言葉を述べています。私はこの言葉が大変好きでありまして、正にそういうものとしてヨーロッパでは大学は成立したし、そういうものが基礎にあって大学のあり方を考えなければならない、という気がするのであります。

さて、それでは金沢の話をしたいのですが、私は第四高等学校の生徒として、その後金沢大学の教師として、15年間金沢におりましたが、特に四高の時代をなつかしく思います。ちょうど終戦後のどん底にあった時代で、物質的には決していい状況の学生生活ではなかったんですけども、この金沢の四高で育ったという事は大変幸福なことだと思っています。同級生たちも皆、第二のふるさと金沢だと思っています。それは、金沢の市民が本当に四高の学生を大事にしてくれて、金沢市のもっている雰囲気、学問を大事にする雰囲気というものに、私共がすっかり惚れ込んでいたせいだろうと思います。食糧のない時でありましたが、伝統のクラスマッチが復活しておりまして、クラスマッチに出るメンバーに食堂のおばさんがパンをくれたりですね、そういう細やかな学生と市民の結びつきがありました。四高が都心にあったという事は、金沢市の謂わば都市計画の上で、金沢市の風格をつくる基本であったのではないかと考えています。

こういう伝統が金沢大学にも受継がれたよ

うに、私は思っております。四高以来の、金沢市と一体になった良さ、つまり金沢という地域社会に抱かれているというものが残っているように思います。金沢大学での地域の研究も、大阪などに比べて盛んで、金沢の発展にとっても金沢大学の果す役割は非常に大きかったと思います。

新制大学は、はじめは駅弁大学と批判されましたが、これはどういう意味かと言いますと、駅弁のある所に大学ができたということで、かつての帝国大学に比べて質が落ちたという批判があったわけです。しかし、教育学の堀孝彦先生が論文に書かれたことですが、そうではなくて、たくさん大学ができたことによって、大学というのはむしろ、それぞれの地域の課題に答える、そういう新しい、帝国大学とは違う大学になるべきであったのではないか、むしろ、地域課題を通じて、国際的・世界的課題に向かっていくような、そういうものでなければならぬのではないのでしょうか。

かつては四高から金沢大学まで都心に大学がありまして、先程も申しましたように、その事が地域の人達との密接な関係を生み出したわけですが、今度、この角間という、都心から車で半時間もかかるところにきてしまったので、今までハイデルベルヒと並んで、お城の中に大学があるのは金沢ぐらいと言われていた、立地の良さを失ってしまったことは、これからの大学にとって非常に大きな問題を投げかけていくだろうと思います。

1970年代前半に、国土庁が工場分散政策の一環として大学の分散を決めまして、筑波大学を典型として、新設の大学を都市から引き離していくという方向をとっているわけですね。大学の拡張をする場合は同じ都市の中にあっても郊外へ出してしまう、という事でありまして、例えば大阪市なども、大阪市内に四年制の大学というのは大阪市立大学だけでありまして、全部郊外に出ていってしまった



▲宮本憲一 大阪市立大学教授

わけであります。しかし、そうなりますと、大阪市そのものが活力がなくなってきます。未来を担っている学生がその街で育て、そしてその街の事についていろいろ考える。或いは、教師がその市内にいて、いろいろ研究をして市民と交流する。そういう場がなくなってしまふわけでありまして。

そういう意味では、都心のなかに大学がなくなってしまったという事は、都市にとっても大変大きい問題であります。大学が移動した後、代りにできるものは大体決っております、大阪外国語大学の跡は国際会議場ができて、大阪大学の跡は美術館や博覧会場になる予定です。そうすると、若い人たちがたむろして、そこで一日を送るという活気のあった場所が、そういう、展覧会があった時だけ、会議があった時だけ人が寄ってくるようなホールになってしまいますと、街のたたずまいが全部変わってくるんですね。私はやはり望ましいことではないと思っております。

東京、筑波の場合でも、大学が出ていって、都市が困るだけでなく、大学が困っております。研究者・学生が、講義が終わりますとパーッといなくなってしまう。当然でありまして、その付近でたむろする場所がありませんし、早く帰らないと電車がなくなったりするからです。その結果、大学の共同体としてのぬくもりが欠けてしまつて、大学は施設に

変ってしまう。そういう傾向が、どうしても都市を離れた大学につきものですね。

1984年になりまして、ようやく国土庁も方針を変更しまして、都市に大学を残す方針に変わりました。約10年たって、やっと変わったわけですが、もう手遅れでありまして、ほとんどの大学はこの10年のうちに移転を決め、移転のための手続きをしてしまった後なのです。私も今更、都心に大学を、という事が言いにくくなってまいりました。そこで、今度はむしろ、都心から離れた大学はどうあるべきかという事を、都市論の立場から提言しなければならないのではないかと考えてまいりました。

そういう点で参考になりますのは、田舎型の大学でありまして、アメリカやカナダの大学が非常に参考になると思っています。例えば州立インディアナ大学、これは全米でも優秀な大学の一つでありますけれども、小さな町にあります。ここに私が行って感心したのは、大学が都市になっているということなんです。

例えば、この大学のレストランが町では一番いいレストランなんですね。だから、誕生日や結婚記念日のお祝いとか、時には結婚式もあるんですが、みんな市民が大学のレストランに来て食事をする。そういう事が楽しみというか、名誉なことになっているんです。或いは大学のシンフォニー、劇団、こういったものは、その町にとっては最高の水準をもっている文化団体でありまして、劇場があって、そこで知的なエンターテインメントが満足させられるわけなんです。

こういうのは、私はアメリカ、或いはカナダの幾つかの大学を見て来まして、同じ様なことを感じるわけで、付近に施設がない大学は、大学自身が都市になっている、というふうに思うのです。

そういう意味では、大学を単に文部省が管理して、文部省が大学を単に、研究・学術の

施設としてつくるだけでは、こういう郊外に立地した大学は駄目になるのではないかと、私は考えています。大学は、これを都市にするという考え方のもとに、研究や教育以外の施設や組織を運営する予算を組まなければならないのではないかと。それを文部省ができないならば、地元の県や市がやらなければならないと、私は思っております。

ぜひ、この角間の新しい大学が、ここが一つの都市になるようにしていただきたい。そして、近くに計画されているようですが、門前町も、あまり貧乏な門前町でなくて、ちゃんと学生が満足しうるような、いろいろな施設のある門前町にしてほしいと思っております。

しかし、マンフォードが言ったように、都市がテクノクラートの独占物になれば「死の都市」になります。大学もテクノクラートの独占物になる事を避けなければなりません。マンフォードは、『歴史の都市』の中で次のように提言しています。「大学は、これから教授ではなくて、教育にならなければならない。科学から知恵、超然から参加へと変質しなければならない」と。大学の研究・教育について、やはり学生諸君が参加されること、そしてまた市民に開放されて、市民参加のなかで形成されることを期待したいと思います。またその点で言えば、金沢大学というのは、大変あたたかい、地域社会と共に歩みうる、理想の大学に向かって動いていきうる大学なのではないかと期待しています。どうもご静聴ありがとうございました。

(大阪市立大学商学部教授)

以上は、1989年10月28日(土)に金沢大学内で行なわれた、金沢大学経済学部角間キャンパス移転記念講演会の講演要旨を、編集担当者においてとりまとめたものである。